

大正期女子中等教育の研究 Ⅰ

— 旧制高等女学校の修身教科書分析を中心に —

○西村 詢子, 倉館 かおる, 山本 礼子, 新井 淑子, 福田 須美子
 (日本女子体育大) (お尋の水女子大) (和洋女子大) (埼玉大) (成城短期大)

周知のように、大正期(1910-1920年代)は、資本主義的生産の拡大と、国民生活水準の上昇にともなう、中等学校就学者が量的に増大した時期である。とりわけ、女子中等学校就学者において、その傾向は著しく、それまで常に男子の水準を下回っていた女子の中等学校就学者数は、大正末年には男女ほぼ同数となる。このことは、女子中等教育の対象が従来の限られた有産階級からより大衆的な社会階層へと拡張されたことを意味する。

一方、この時期は、第一次大戦後の国際協調体制の下に、いわゆるモロクラニーの月潮が、世界的に昂まった時代である。このような思想的背景の下で、旧来の高等女学校令等にあられた「家制度」の維持を基軸とするいわゆる良妻賢母主義の教育理念も、一定の修正がはかられざるを得なかったものと推定される。

このことと、旧制高等女学校及び実科高等女学校の修身教科書の内容から分析し、その推移をとらえようとするのが、本研究の目的である。

日清・日露・第一次大戦とついでに、対外戦争とそれによる資本主義の拡大、及び、多様な国際的思潮の影響のもとに、修身教科書は、大正期後半にあきらかなる変化を示す。そこでは、モロクラニー、個人主義、人格主義、科学的精神、婦人参政権運動、労働運動、女子と職業、女子と高等教育などが論じられ、女子の地位については、従来の男尊女卑の思想が批判されて、

人格的には、男女は対等と考えられた。新しい時代に生きるものとしての女子の覚醒がうかがわれ、女子も男子同様、市民社会、国際社会に目をむけ、文化・芸術を理解し、科学的知識を自身の廻りの生活改善などに行い、さらに、家庭生活に不都合をきたさない程度の職業にも従事しうる能力が期待された。

大正期の良妻賢母主義教育理念は、このように、女子を人格的には男子と対等であるとしながら、しかし、その反面、男子とは異なる性としての母性を強調するものであった。

子と生み、慈愛にみちた母性愛のもとで、子どもを養育することは、民族の生命を永遠に続かせる女子の尊い天職と考えられた。

この母性の強調により、祖先・家内の敬愛・父母への孝行から、子どもの養育へと女子の役割上の強調点を移行することによって、この期の修身教科書は、多様な新思潮の中にあつて、日本独特の家制度維持の役割を果たしたものである。

修身科の基本は、わが国の国体観念の養成と家制度の維持であるが大正期にあつても、以上のような修正を受けながら、その基本は、変ることにはなかった。

なお、ここでとり上げた修身教科書は、東京書籍文庫所蔵中、検定済のものを使用した。